



北大武山山頂、台湾鉄杉の樹相が美しい

■台湾、登山事情

台湾の山に登るには、いろいろ厄介な台湾の決まりがある。外国人は関係機関（警察など）に入山許可を得て入山する。山域の呼び方も「山地管制区」とか「国家公園」とかがあり、この違いは外国人にはわからない。さらに3000m以上の山に登る場合、外国人だけでなく台湾人も、登山指導有資格者1名の同行が必要、また最低3人以上の人数で等々…。これらの手続き、車の手配などは部外者の手に余るので、以前ツテがあった台北の「中華民国遡溪協會」に依頼して整えてもらった。連絡したのは9月末だったが、11月から12月は台湾の登山シーズンで、台湾国内の登山者多数が、入山許可を申請するための許認可交付事務が集中する。もっと早い時期に連絡がほしかったそうで、会長の荘さんに迷惑をかけてしまった。計画2カ月前では手続きが忙しいのである。

台湾の登山ではなぜ面倒な手続きがいるのか？。ここからは私の推測だが、日本統治時代に治安上の理由（少数民族との摩擦など）で、2500m以上の山間部を通行するには許可が必要だったのでこれを踏襲、中国大陸からの諜報活動を警戒、そしてこれだけチェックされると、無謀登山が無くなり、安全性が高められる。こんなところかなと思っている。ともあれ、他国の規則なので尊重しなければならない。

■台湾、山岳国

台湾は、九州より少し小さいサツマイモ形の島である。この島に最高峰玉山（昔は新高山）3952mを筆頭に3000mを越える山が258座あるといえ、少しでも登山に興味のある人は驚く。驚くのもそのはず、日本では3000m以上の山は21座で、富士山こそ3700m台だが、残りの20山は、やっと3000mを越える程度で「山国日本」も台湾に比べると、顔色なしだ。台湾では高山がひしめいているといえよう。



姓名		性別	出生年月日	出生地	國民身分證統一編號	職業	申請日期	核准日期	核准時間
張麗雲		女	民國 年 月 日		P20346	公	臺北縣	臺北縣	臺北縣
入山事由	登山健行		停留期間	自 97 年 11 月 21 日 時 分 至 97 年 11 月 23 日 時 分		攜帶物品	護照		
申請地點	臺東縣各武鄉		北大武山						
申請者	等3人(附名冊)								
申請人數	3人								

北大武山入山許可証

台湾にも台湾版の「百名山」があり、「台湾百岳」という。前置きが長くなったが、今回登った「北大武山」はその「台湾百岳」のなかで最南端にあり、玄関駅が高雄というわけだ。

'08年11月21日、台北駅から7:00発の台湾新幹線で終点の「左営」へ行った。メンバーは私と妻、リーダーで遡溪協會の重鎮、張麗雲さんの3人。張女士は若いときは困難な沢登りを何本もこなしたが、そんな経歴を感じさせない、控えめで小柄な人だ。以前アルバイトで来日したことがあり、日本語の日常会話ができる。

新幹線は高雄中心部には入らず、手前の高雄市左営区の「左営」駅が当面の発着駅で、日本の東北新幹線が長らく大宮発着だったようなものだろう。

8:36左営着。携帯で通話しながら小走りに歩く張さんのあとに付いて、改札を出る。続いてエレベーターで屋上へ運ばれるとそこは駅駐車場で、お迎えの車もすでに停車していた。運転手は大柄で鍛え上げた体つきの陳さん、車は少しくたびれた四駆車（三菱デリカ）だった。陳さんは山岳ガイドもするし、登山口への輸送等も請け負う。北大武山の登山口へはここ数日は連日行っていると、陳さん経由で説明された。走り出すと駐車場からの誘導路はじかに高速道路に吸い込まれた。

旅の楽しみのひとつ「駅の雰囲気」を味わうことはかなわず、効率的な駅舎設計のおかげで、市街地をカットして高速道路上を走った。かなりの高みからみわたす、南国的風景を突き進む。

高速道路から一般道に降りると、南国風景は目の高さになり、沿道には養殖池や、アヒルの群、果樹園などが続く。街並みが村落になると、商店が無くなるので買い物。飲み物、果物（ポンカンと柿）、昼食用に少数民族のおばさんが蒸すチマキなどを購入。いつの間にか雄大な山なみの輪郭が現れこれが目指す北大武山だ。

四駆車は舗装した山道を快調に登ると、はては砂利道の林道となり、やがて悪路となった。四駆でない乗用車が何台か駐車している脇をすり抜ける。こちらは四駆車だけのことはあり、波乗り運動で岩角を乗り越えて進む。大丈夫とは思えけれど車体が谷側へ傾くと、尻のあたり



アリサンアイ(台湾名:曲莖馬藍)咲く山道を行く



満員の「檜谷山荘」、通路に寝る人もいる

がムズムズする。11時過ぎに登山口に着く。そこは北大武山から派生する尾根上の鞍部で、ちょっとした広場になっていた。標高約1500m。先着の車が20台ほど、てんでにすき間を見つけて駐車していた。

車から降りると荷物をまとめ、昼食用に買ったチマキを食べる。木の実や鶏肉などが入って1個25台湾元(約90円)、うまい。2つ食べたら満腹になってしまった。

張さんを先頭に出発。しばらくは山腹に沿った常緑樹の路を行く。藍色の小花(アリサンアイという)をたくさん付けた灌木の茂みが続く。日陰の花だが陰気でなく、涼やかだ。

しばしば行き会う人や、追い抜く人がいて、張さんが情報交換や挨拶を交わす。私は「你好!」^{ニイハオ}とかけ声だけ。登山者のいで立ちもいろいろで、スパッツを付けた人や、ゴム長で歩く人もかなりいた。今日の行程は「檜谷山荘(標高2150m)」という山小屋までだから楽だ。ただし無人小屋なので、食料、寝袋などは自分で担ぐ。日本の登山では、日帰りの荷物で歩くことが多く、久しぶりの重荷によたよたする。

岩場の急な登りのあと、巨岩の積み重なりとなり、展望が開ける。深い谷底は霞に隠れ、対峙する痩せた岩尾根は荒々しい。この見晴台から10分ほどで檜谷山荘に到着。14:30。

■ 檜谷山荘

登山口にあって、たくさんの車から予想はしていたが、暗い小屋をのぞくとすでに満員。小屋のつくりは、通路の土間が内部を貫き、その左右が板張りの床。床は、広げた寝袋、横たわる人たちで満杯だった。通路に敷物を広げて場所取りをしている人や、炊事場のベンチを寝床と決めている者もいる。小屋の収容能力は、公称60人だが、野外に寝床を整える人などもいて、総計100人くらいの人と踏んだ。それ以外に大きなテントが幾張りもあり、野営場は夕餉の支度で賑わっていた。

ぼう然としていると、張さんからお知らせ有り。先ほどの見晴台で、顔見知りの山仲間がいたので、頼み込ん

で場所を譲ってもらう取り決めをしたとか。彼らは午前中に早く小屋について、場所を確保した後、見晴台でくつろいでいた。あとから思えば見晴台で、張さんが長めの情報交換をしていると思ったが、必死で頼み込んでいたのかと思うと、経緯を知らなかったといえ申し訳なかった。もちろん、突然の要請を快諾して場所を譲ってくれた彼らにも、感謝感謝である。

彼らは、高雄の山岳会に所属し、今回山が初めてという、女性二人を交えた6人のグループだった。6人組は水道の蛇口が付いた流しのすぐ脇、水汲みが楽な一等席のベンチを確保しており、こちらも招かれて夕餉の時となる。我々の夕食は簡単質素の鰻丼と海草サラダ。このレトルトウナギは台湾産で、日本に渡ってから私らに買われ、再び台湾へ運ばれるという数奇な運命をたどった。高雄の山岳会は本格食材で、野菜を刻んだり、肉を炒めたり、男衆がこまめに準備していた。

陽が傾くと、空気が冷えて寒くなり、夜に備えて着込む。宴が始まると、彼らにあわせてコーリャン酒を少々飲み、彼らの怪しげな日本語と、私のインチキ中国語が飛びかかって、その場を愉しんだ。女性の一人は日本びいき(ハリズー^{ハリズー}?)で片言の日本語をすこし使う。日本のことを手放してほめるので、気恥ずかしかった。

さて、我々の寝る場所は、彼らの場所を少しずつ詰めて入れてもらうものと思っていたがそうでなかった。なんと若手のメンバー二人があっさり寝床を空け、野外で一夜を過ごすというのだ。張さんの説明によると、小屋にいる登山者の多くは「プロ(有資格指導員ということか)」で、かなりの人が「訓練」で野宿するらしい。空いた二つの場所には妻と、張さんが寝る。三人目の私は「男の子」なので、軒下で我慢するよにとのこと。

まだ、あちこちで宴は続いてしたが、我々は寝る体勢になる。妻と張さんは小屋の中、私はコンクリートのタタキに布陣する。外の落ち葉の方が良いかもと思ったが、コンクリートに新聞紙、マットと順に敷き、着ぶくれの体を寝袋に入れた。夜中に風が吹き木々が騒いでいた。(続く)